

いのち  
生を濟う。  
人も地球も



平成25年度

社会福祉法人 恩賜財団 済生会

# SR報告書

(環境社会報告書 ダイジェスト)

# Contents

- 1 編集方針
- 1 平成25年度済生会SR報告書の発表にあたって
- 2 済生会の意義と使命
- 3 済生会 事業の概要
- 5 特集①  
地域・社会への貢献
- 7 特集②  
社会を支える組織づくり・人づくり
- 9 特集③  
地球の生を済いのちすくう

## 編集方針

済生会SR報告書(環境社会報告書)は、済生会が日頃取り組む環境、労働、安全衛生、社会貢献などの活動状況を余すところなく、かつ分かりやすく報告することを目指しており、本ダイジェストでは、社会・組織・環境それぞれの分野での特徴的な取り組みを紹介しています。詳しいデータは、ホームページ上にてデータ編として公表しています。

### 対象期間

平成25年度  
(平成25年4月1日～平成26年3月31日 一部を除く)

### 対象施設

187拠点  
※ここでは、全施設を187の拠点に分けて報告しています。これは建物ごとに適用される省エネルギー法に準拠したもので、実際の施設数とは異なります。

### 発行時期

平成26年10月  
(前回：平成25年10月、次回：平成27年10月予定)

### 冊子の入手方法

SR報告書(ダイジェストおよびデータ編)は済生会ホームページからご覧になれます。

URL：<http://www.saiseikai.or.jp/>

## 平成25年度 済生会SR報告書の発表にあたって

ここに「平成25年度済生会SR報告書」を発表できますことは、大変嬉しく存じます。昨年済生会として初めてSR報告書を発表致しましたが、幸い多くの人から望外の高い評価をいただきました。

今日、環境と社会に関する課題に対して社会福祉法人として積極的に取り組むとともに、これらの状況を情報公開することが強く求められています。

近年地球温暖化の進行、生物多様性の危機、資源の浪費など地球規模の環境の危機が私たちの身近に迫っています。平成26年に入っても環境の悪化に起因する甚大な被害をもたらした災害やデング熱の蔓延などが全国各地で発生しています。

一方、就労の機会に恵まれない多数の障害者が存在します。私は、平成26年6月にベルリンに出張しましたが、障害者が一般の労働者と同じように働いている様子に接し、日本の遅れを切実に感じました。高齢者の孤立・無縁死の増大、進まぬ刑務所出所者の社会参加など解決が容易でない社会問題も増大しています。

済生会は、明治44年に明治天皇によって発せられた「済生勅語」によって創設されましたが、設立の目的は、生活困窮のために医療を受けることができない人たちを支援することでした。この目的は、今日でも本会の根本的な使命でありますので、上記の社会問題の解決に率先して取り組んでいかなければならないと考えています。

環境問題に対しても、医療と福祉サービスを提供する日本最大の組織である本会は、影響力が大きく、その向上に努めていかなければなりません。

ここに発表致します「平成25年度済生会SR報告書」は、本会の25年度の環境と社会の両分野についての取り組み状況を詳細に述べています。中には反省すべき事項も含まれていますが、本会の病院・社会福祉施設の利用者や従事者など関係者を始め、広く国民の方々に本会の取り組み状況を知っていただき、足らざる点については忌憚のないご批判をいただければと思います。

私たち済生会は、今後とも環境と社会の両面について一層の向上に努力していきたいと思います。



社会福祉法人 済生会  
理事長 炭谷 茂

# 済生会の意義と使命

## 済生会の成り立ち

済生会は、明治天皇の「済生勅語」に基づき、明治44年に設立されました。社会に増えた困窮者に無償で医療を行い、それによって生を済いのちすくおうとしたのです。各地に診療所を設け、貧困所帯に無料の特別診療券を配布し受診を促したほか、巡回診療班を編成して困窮者の多い地区を回り診察・保健指導を行いました。

第二次世界大戦後、済生会は社会福祉法人として再ス

タートを切りました。天皇のお志を忘れないため、「社会福祉法人 済生会」を正式名称としています。現在、第6代総裁に秋篠宮殿下を推戴し、会長は豊田章一郎、理事長は炭谷茂が務めています。地域の方々の目線に立って、皆様に最適な医療・保健・福祉を総合的に提供することが私たちの最大の使命だと考えています。



明治天皇



第6代総裁 秋篠宮殿下



会長 豊田章一郎

## 済生会の使命 — 三つの目標

日本最大の社会福祉法人である済生会は、100年以上にわたるこれまでの活動をふまえ、右の三つの目標の下、約56,000人の職員が40都道府県で医療・保健・福祉活動を展開しています。



## 事業の中核

済生会では、「生活困窮者への援助の積極的推進」、「地域医療への貢献」、「総合的な医療・福祉サービスの提供」を三つの柱として事業を展開し、私たちの役割を果たしていきます。

### 生活困窮者への援助の積極的推進

- 無料低額診療事業への取り組み
- 生活困窮者支援事業(なでしこプラン)への取り組み

### 地域医療への貢献

- 医師・看護師等の優秀な人材の確保・育成
- 医療・福祉サービスの質の評価・公表

### 総合的な医療・福祉サービスの提供

- 地域ネットワークの構築
- 医療・福祉連携地域ネットワーク 済生会モデルの普及

# 済生会 事業の概要 (平成26年3月31日現在 一部を除く)

## 医療関係

### ■ 医療施設の事業

施設数	100
	(病院79、診療所21)
許可病床数	22,406
患者のべ数	17,263,569人
	(入院6,680,462人、外来10,583,107人)

### ■ 無料低額診療事業

患者・入所者のべ数	1,920,144人
※無料低額診療事業とは、経済的に困りの方々のために、病院・診療所および介護老人保健施設にて無料または低額な料金で診療を行う事業です。	

### ■ 公衆衛生・保健予防活動

検診車等による院外検診 実施のべ回数	965回
受診者のべ数	57,651人
院内検診 受診者のべ数	489,525人
人間ドック 受診者のべ数	181,159人
予防接種 受診者のべ数	161,794人

### ■ 瀬戸内海巡回診療「済生丸」

巡回した島	62
受診者のべ数	9,454人
出動のべ日数	211日

### ■ 第2次なでしこプラン (済生会生活困窮者支援事業)

事業数	309事業
	(38支部)
対象者のべ数	132,744人

## 介護・福祉事業

### ■ 介護老人保健施設の事業

施設数	29
利用者のべ数	991,914人
	(入所754,418人、短期35,937人、通所川*201,393人、訪問川166人)

### ■ 社会福祉事業

事業総数	359
	(施設数153、実施事業数206)
利用者のべ数	3,491,936人

#### ■ 施設の内訳

救護施設	2
児童福祉施設	22
老人福祉施設	121
障害者自立支援法関連施設	8

#### ■ 事業の内訳

障害児通所支援事業	6
障害児相談支援事業	9
子育て短期支援事業	5
地域子育て支援拠点事業	3
一時預かり事業	3
老人居宅介護等事業	35
老人デイサービス事業	17
老人短期入所事業	47
小規模多機能型居宅介護事業	4
認知症対応型老人共同生活援助事業	4
複合型サービス福祉事業	1
障害福祉サービス事業	54
一般相談支援事業	3
特定相談支援事業	11
移動支援事業	4

※リハビリテーション

## 医療と福祉をつなぎ、 いのちの虹になりたい

済生会は、40の都道府県に支部を設置し、都道府県支部ごとに地域のニーズに合った医療・保健・福祉サービスを展開しています。

## その他

### ■ 公益事業

施設数	89
事業数	101
利用者のべ数	638,426人

### ■ 施設の内訳

看護師養成所	8
指定訪問看護ステーション	51
乳児地域交流事業	1
自動車事故対策機構法の療護センター	1
企業委託型保育サービス	1
地域包括支援センター	22
有料老人ホーム	1
発達障害者支援センター	1
地域生活定着支援センター	3

### ■ 事業の内訳

居宅介護支援事業	80
訪問入浴介護事業	8
福祉用具貸与事業	1
在宅生活復帰支援住居提供事業	1
福祉有償運送事業	2
過疎地有償運送事業	1
日中一時支援事業	6
特定施設入居者生活介護事業	1
ハンセン病療養所入所者社会復帰等支援事業	1

### ■ 収益事業

スポーツ及び文化的活動を支援する事業等	5
---------------------	---

事業総数 **683**

(施設数371、実施事業数312)

職員数 **56,114人**

(平成26年4月1日現在)

## 地域へ貢献する病院をめざして

済生会は創立100周年(平成23年)にあたって、生活困窮者を医療で救済する「施薬救療」という創立の理念に立ち返り、法律に基づかない済生会独自の「済生会生活困窮者支援事業なでしこプラン」を展開しています。ホームレスや家庭内暴力(DV)被害者、刑務所出所者、障害者、高齢者、在留外国人等で、医療・福祉サービスにアクセスできない方々に巡回健診、予防接種、健康相談等の支援を行っています。

今回は、大阪府済生会支部が支部内8病院とともに釜ヶ崎地区において毎年行っている健診事業について紹介します。

### ■大阪府済生会 なでしこプランのその先に続く支援をめざして

#### 支援は、本人の考えに合わせ、 急がず、しっかりと

大阪府済生会支部がNPO法人釜ヶ崎支援機構と協力して毎年実施している釜ヶ崎地区健診事業(大阪市西成区あいりん地区)は、平成25年で5回目となりました。事業では、一斉健診と、その後「要医療」との判定結果が出た方を対象に個別に行う保健指導があります。今回、当事業を受けられたKさん(男性・60代)に、お話をうかがう機会がありました。

Kさんは市内で、現在、野宿生活をしています。平成23年の当事業で「要医療」と診断され、医療ソーシャルワーカー(MSW)、NPO担当者とともに当院に來られました。循環器内科で診察の結果、高血圧と診断され、通院による服薬継続を指導されました。当院は西成区(あいりん地区)から離れているため、通院継続が可能かどうかお尋ねしましたが、「大丈夫」との返事があったこと

から、無料低額診療事業を適用しました。しかし、今年度に入って受診は継続されず、どうされたのだろうかと思っていたところ、平成25年9月の健診で再会。今回も当日「要医療」と診断され、また当院を受診されたのです。

Kさんに、受診を中断した理由をお尋ねしました。「医療費窓口負担の減免決定の期限が切れてしまったから」「会計で、もし請求をされて金がないということになるとマズイと思ったから」。実際は、Kさんは前年度末にMSWと面接し、減免の更新手続きを行っており、更新は決定していましたが、こちらの説明不足だったようです。今回の釜ヶ崎地区健診をきっかけに、再度、当院の受診につながったことを喜んでいました。



ホット

コラム

1

### ■前橋病院(群馬県)

#### 「将来の夢」応援します！～病院探検「キッズ探検隊」～

前橋病院では、小学生を対象にした医療現場体験学習「キッズ探検隊」を昨年から始めました。第2回目となる今年は、小学校低・中・高学年の子どもたち各10名とその父母など、計30組が、外来診療後の8月第一土曜日の午後、病院内を探検しました。

探検隊は、2学年ごとに分かれ、外来処置室での聴診器・血圧測定、手術室で術衣を着ての腹腔鏡操作や内視鏡操作、調剤、医療機器操作、エコー、顕微鏡操作、リハビリなどの様々な医療を体験します。子どもたちには、あらかじめ紙カルテを使用した各職種の紹介資料を渡し、体験中に気づいたことや感じたことを書き込んでもらいます。最後に、開会時に撮影した集合写真と一緒に修了証を渡して探検が終了。これで夏休み自由研究が仕上がるような仕組みです。

参加する子どもの多くは「将来、医療の仕事に就きたい!」と希望しています。この探検隊が、夢の実現に向けてしっかりと歩んでいく最初の一步となればうれしいです。



## ワケありで 毎回受診できない人も

昨年の通院中には服薬の指導もあり、「薬のために、朝食を食べんワケにはいかんようになった」「たとえラーメン一杯でも口にしてから薬を飲み、働くようになった」と生活の変化を語ってくださいました。Kさんは「以前の(他のNPOが実施していた)結核の健診がなくなってから、この健診が始まって助かっている」と、毎年参加されています。しかし、「ここ(あいりん地区)に暮らす人たちはワケありで、名前を伏せて生活している人も少なくない。何かのきっかけでバレるのではないかと恐れているから、色々難しい」そうで、「自分のように毎回健診に来る人ばかりではない」そうです。

なるほど私たちMSWIは、負債の取り立てが理由で違う名前を使っている、住民票を動かせない理由があるので保険証が作れない、だから必要な医療を受けることができないというような相談を受けることがあります。そういった心配事については解決する手立てがあることを日々の業務でその都度伝え、支援しています。

## 「テントで大丈夫」

今後、この健診事業によりご自身の医療を確保した後は安定した生活の場の確保を、とMSWとしては考えるのですが、「今のテント(野宿地)で大丈夫」とKさんは言います。これから寒くなりますが?と水を向けても、「冬は寝袋を2枚重ねて眠ると30度になるから、全然寒くない」「1日1,000円で生きていけるし、今の場所でネコもなついているし、当分(野宿地を)離れる気はない」と乗って来てくれません。また、Kさんの人柄なのでしょう。「野宿させてもらっているのだから、公園や道端の掃除をすることがある」「そんな時に、近所に住んでいる人と挨拶した



りする」とのことでした。こうしたKさんのお話から、野宿生活の終了はご本人のペースでゆっくりと進むしかないのだろうと感じました。

今後も、Kさんの外来通院の機会を利用して、短時間であっても顔を合わせようと考えています。なでしこプランのその先が続く支援として、MSWIにできることを考えています。

### データ編

#### 地域・社会への貢献活動の実施

済生会では、なでしこプランのほか、各施設が主体となった地道な活動も行っています。平成25年度は、全国の95施設が環境や地域、社会への貢献を目指した活動を行いました。

その一部をご紹介します。

植栽活動 (8施設)	小樽病院(北海道):「北海道」千年の森プロジェクト 平塚病院(神奈川県):花の委員会による敷地内美化活動 児童養護施設静岡県川奈臨海学園、特別養護老人ホーム小鹿苑(静岡県):静岡県グリーンバンク 他
ペットボトル キャップ回収 (35施設)	龍ヶ崎病院(茨城県):世界の子どもたちへワクチンを贈るNPO法人Reライフスタイルへの協力 岡山病院(岡山県):岡山旭川ロータリークラブのエコ活動へ協力 他
清掃活動 (47施設)	新泉南病院(大阪府):近隣グリーンロード(遊歩道)の清掃 特別養護老人ホームめずら荘/軽費老人ホーム唐津市寿楽荘(佐賀県): ラブアースクリーンアップ活動への参加 他

ホット

とコラム

2

### ■特別養護老人ホームながまち荘(山形県) 連携して食品ロスを削減

特別養護老人ホームながまち荘では、食品としての機能は十分あるにもかかわらず、「賞味期限が近付いた」「ラベル印刷にミスがあった」等の理由で廃棄される食品(食品ロス)を削減するため、一般社団法人中央ライフ・サポートセンターの「新しい食品循環ネットワーク」に協力しています。同ネットワークは、「食品企業(食品の提供)」「物流企業(輸送)」「福祉施設(活用)」が連携して行う社会貢献活動です。

提供される食品は、インスタントのお味噌汁、乾物、ジュース

など常温保存できるものがほとんどで、賞味期限も半年~1年と想定より長いため、災害用の備蓄食品の一部として活用しています。この取り組みをきっかけに、職員の間で食品ロスへの意識が高まり、入居者の皆様にも残さず食べていただくことや、職員自身が自宅や外食で食品を無駄にしないよう心掛けるようになりました。

日本では年間500トン以上の食品が廃棄されているそうです。小さな取り組みですが、この取り組みを他の施設にも広めていきたいです。

# 済生会の理想の実現をめざして

## ■福井県済生会病院 病院、職員、患者さんをつなぐコミュニケーション

### 「地域に愛される病院の模索」 プロジェクト

福井県済生会病院は、福井市の市街部にあり、がん総合診療・重症疾患・救急医療・健診医療などの急性期医療を特徴とする一方、「患者さんの立場で考える」を基本理念に掲げ、保健・医療・福祉を統合した総合医療を目指しています。また、「済生の心」を全職員で共有し、患者さんのために働く職員教育に努めています。特に、SQM (Saiseikai Quality Management system：組織全体で取り組む品質管理活動)の一環としてのワークアウトプロジェクト※や階層別研修などを通して、チームとしての取り組みや職種横断的なコミュニケーションの活性化に力を入れて取り組んでいます。

平成25年度は、「地域に愛される病院の模索」がワークアウトプロジェクトのテーマの一つに挙げられました。プロジェクトには、各部署から8名のメンバーが選ばれ、地域貢献活動を検討することとなりました。他の多くの職員から「病院が社会に貢献する必要はあると思うが、実際にやったことはない」という声が寄せられたことから、職員向けのポータルサイトや業務連絡用のデジタルサイネージ(電子看板)を活用し、病院が地域への貢献活動を行うことの重要性についてPR活動を行いながら、近隣地域での清掃活動の実施を計画しました。

平成25年10月19日の土曜日、66名もの職員が集まり、4班に分かれて周辺の駐車場などでゴミや空き缶を拾い、

草むしりに汗を流しました。実施後のアンケートでは、参加した職員の多くが「次回も参加したい」と答え、参加できなかった職員からも「済生会は社会に貢献するために作られた組織であり、貢献活動は地域への恩返しの意味も含めて重要」といった意見が多く寄せられました。職員への周知も進んだことがわかり、8名のプロジェクトメンバーは、今後の貢献活動の展開に大きな手ごたえを感じました。

※発生した問題に関係する多職種がプロジェクトチームとして集まって話し合い、さまざまな角度から対策を考えて解決を目指す手法。



### 広がるコミュニケーションの成果

このように活発な院内コミュニケーションは、省エネ活動を進める上でもよい影響をもたらしています。当院では施設課の担当職員が中心となり、熱源・空調設備などの技術的な省エネ施策にとどまらず、「自分でできるeco行動」と銘打った、全職員の省エネ意識を高める活動に取り組んでいます。この活動も院内に浸透しており、今では逆に職員の方から省エネ行動の提案がされるようになってきました。

このように組織の目標を全職員が共有し、達成に向けて一丸となって取り組む姿勢は、コミュニケーションを重視した職員教育によってもたらされた、職員全員に広がる「チーム意識」によるものに違いありません。



**CSR 知っていますか??**

CSR (corporate social responsibility) とは・・・  
企業の社会的責任のことで、自社の利益を追求するだけでなく、自らの組織活動が社会へ与える影響に責任を持つことを意味します。  
典型的なCSR活動として「地球環境への配慮」や「地域社会参加などの地域貢献」などがあります。

今、企業・組織には CSR が求められます。  
CSRを理解し、  
**地域に愛される病院**をめざしましょう。

地域に愛される病院の模索プロジェクトメンバー一同

デジタルサイネージ(電子看板)でのPR

## 働き続けられる職場にするために

吹田病院では、独自のナースバンク「くわい制度」を導入しています。子育て中や介護中などで勤務形態が合わず、働くことが難しい潜在的な看護師<sup>※1</sup>に登録してもらい、各自の都合に合わせて働いてもらう制度です。超短期(2時間/日)、週1日ずつの登録でもよく、家族の急病や行事などによる急な変更も可能です。現在、53名が活躍していますが、一度働き始めると、登録を解除する方はほとんどいません。

平成16年、17年と2年続けて離職率が20%を超え、労働環境の改善と職場内のコミュニケーションの回復が急務でした。看護部と事務部が協力し、週休2日制や夜勤看護体制の充実などの労働環境の向上、また、看護師長を要とした、現場での充実したコミュニケーションの確立に取り組む中で、現職看護師および潜在看護師の多様な働き方を助ける「くわい制度」を始めました。

※1 看護師の資格を持ちながら、結婚・出産を機に退職したり、子育て中や他分野への興味などの理由で現在働いていない看護師。  
※2 入院患者7名に対して、常時看護師1名以上を配置する体制。

くわいナースには、「7対1の看護体制」<sup>※2</sup>の+α(プラスアルファ)として、現場補助として働いてもらっています。自宅でビデオ学習ができる「くわいラーニング」も準備していますが、ほとんどの方は、現場で勘と知識を取り戻しています。新しい現場に入ったくわいナースには、先輩くわいナースがオリエンテーションを行い、業務を共有してすぐにチームの一員になります。

制度の導入にあたっては、当初は反対意見もありましたが、パイロット事業として試験的に取り組む中で根付いていきました。くわいナースが実際に働き出すと、その効果はすぐにわかります。また、くわいナースからパートや嘱託、正職員になる看護師もいますし、逆に子育てなどを機に正職員からくわいナースとなる例もあります。働きやすい職場づくりには、どのような働き方であっても、受け入れ、一緒に働いていこうとお互いを認め合えること、またチームとしてのコミュニケーションを充実させることが何より大事だと実感しています。

### データ編

#### 男女別雇用形態別職員数(常勤換算数)

種別	性別	換算数(人)	割合(%)
常勤	男性	10,894	23.8
	女性	29,831	65.1
非常勤	男性	718	1.6
	女性	4,407	9.6
合計		45,850	100.0

※割合(%)は四捨五入

#### 管理職の男女別割合

役職	性別	実数(人)	割合(%)
常勤管理職	男性	2,227	62.3
	女性	1,350	37.7
合計		3,577	100.0

#### 子育て支援の取り組み

種別	施設数
院内保育所の設置	69
3歳以降の短時間勤務制度	54
病児保育の実施	31
育児休業の一部有給化	3

### ホット

#### コラム

#### ■特別養護老人ホームながまち荘(山形県) 一人ひとりの働く環境を整える

特別養護老人ホームながまち荘では、3年ほど前から非常勤職員やパートを含め、全職員に、産業カウンセラーによるカウンセリングを実施しています。任意のカウンセリングだと相談があっても周囲の視線が気になってしまうため、当ホームでは業務の一環として行っています。職員のような悩みをサポートし、一人ひとりが働き続けられる環境を整えるために、専門のカウンセラーにお願いしました。

相談内容は、業務に関することに限らず、子育てに関する相談やストレスチェックなど様々です。仕事や家庭への助言を受けたり、成長を評価してもらったり、また、メンタル面のサポートを受けることもあります。このように「第三者」の立場からサポートしてもらうことで、職場環境の向上だけでなく、職員が働き続ける中で抱える心身のハードルを、スムーズに解決するきっかけになっていると感じています。

# 環境保全の取り組み

済生会環境スローガン

いのち すく 生を濟う。人も地球も

活動方針

- 1.省エネルギーの推進
- 2.省資源化対策
- 3.廃棄物・排水の適正管理・処理、排出削減
- 4.関係法令の遵守

## ■広島病院 現地調査で高い評価を得た省エネへの取り組み

### 病院内外が一丸となって取り組む

平成26年1月、広島病院は、経済産業省より、省エネ法<sup>\*</sup>に基づくエネルギー管理指定工場の現地調査を受けました。これは、工場やビルなどに対し、電気やガスなどのエネルギーの使用状況の確認や、空調設備・給湯設備などにおいて省エネにつながる運転やメンテナンスの実施の有無を調査するものです。

病院では患者さんに快適な療養環境を提供するため、一般的に多くのエネルギーを使用します。そのため、広島病院では担当職員とビルメンテナンス会社の職員が日頃からコミュニケーションを図り、省エネを意識した設備の運転・管理に取り組んでいます。特に、担当職員は病院の職員だけが「省エネ」に向けて頑張るのではなく、ビルメンテナンス会社など病院で働く様々な委託会社の職員も一丸となって、省エネを意識した仕事をしてもらえようとする雰囲気づくりに取り組んでいます。

このような取り組みの成果として、経済産業省の調査では、  
●空調設備・給湯設備などの運転管理マニュアルが整備され、適正に運転していること

- 運転状況を計測して記録していること
  - 定期的に設備のメンテナンスがされていること
- が確認され、「総合評価点99.4点」という高評価をいただくことができました。

<sup>\*</sup>エネルギーの使用の合理化に関する法律

### 日々の取り組みで意識を高める

また、広島病院では、平成25年6月および12月に、効率よく蒸気を発生させることができる貫流型のボイラーへの更新を行いました。その結果、平成24年度に比べ、ガス使用量を16%削減することができました。さらに、夏期(7月~9月)は省エネ強化月間として、「昼休み中の照明の消灯」や「院内文書における裏紙の使用促進」など省エネ・省資源につながる目標を定め、部署ごとに、毎日異なる担当者が取り組み状況をチェックする体制を整えています。

このように広島病院では、建物や設備の維持管理を担当する病院職員と委託会社が、日々協力して省エネに取り組んでいます。また、その他の職員も日頃から省エネに対する意識を高く持ち、環境への配慮と患者さんへの最適なサービスの提供の両立に努めています。



#### データ編

#### ■エネルギー消費量

【済生会全体のエネルギー消費量】

エネルギー消費量 126,536kL(原油換算値)

CO<sub>2</sub>排出量 284,208tCO<sub>2</sub>

エネルギー消費原単位<sup>\*</sup> 61.35kL/千m<sup>2</sup>

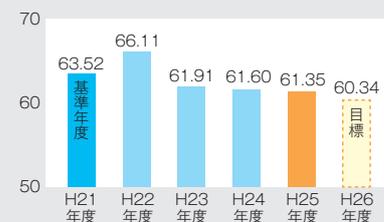
<sup>\*</sup>エネルギー消費量(原油換算値)を総延床面積で割った単位当たりの消費量  
エネルギー消費原単位=エネルギー消費量(原油換算kL)÷総延床面積(千m<sup>2</sup>)

#### エネルギー消費量と原単位

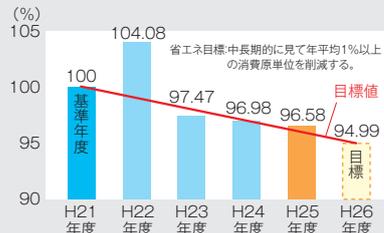
項目 [単位]	平成21年度 (2009)	平成22年度 (2010)	平成23年度 (2011)	平成24年度 (2012)	平成25年度 (2013) (対21年度)
①エネルギー消費量 [kL]	123,554	128,900	124,947	125,684	126,536 (2.4%増)
②CO <sub>2</sub> 排出量 [tCO <sub>2</sub> ]	236,087	232,371	227,498	261,850	284,208 (20.4%増)
③総延床面積 [m <sup>2</sup> ]	1,945,076	1,949,743	2,018,308	2,039,983	2,062,562
④平均原単位 [kL/千m <sup>2</sup> ]	63.5	66.1	61.9	61.6	61.35 (3.4%減)

#### ■エネルギー消費量と原単位

エネルギー消費原単位  
の推移(kL/千m<sup>2</sup>)



基準年度に対する割合



■二日市病院(福岡県)

思い切った改修で環境負荷と経費を削減

二日市病院は、昭和22年の開設以来、福岡の南部ベッドタウンである筑紫地域の中核病院として、急性期医療を中心とした救急医療に取り組むとともに、地域医療連携を目指し、地域住民の皆さんに安心と信頼を持っていただけるよう努めています。

病院の建物は10年前に建設されたものでしたが、熱源・空調機器は修理やメンテナンスが必要になり、費用がかかるようになってきました。また、昨今、電気・燃料代が高騰し、平成26年以降の経費の増加は明らかです。特に、重油を燃料とする常用発電機(640kW)は、重油代を10年間の固定契約としていたため、大幅な負担増が避けられません。過去には、この発電機から発するばい煙に対して、近隣住民から苦情が寄せられたこともあり、機器の環境

負荷を改めて考える必要がありました。

このような状況の中、担当職員を中心に対策を検討し、今後の診療報酬の動向予想や消費税増税をにらんで、機器の寿命前の更新を思い切って提案しました。病院長は、「病院の経費のことも重要だが、環境に負荷をかけているなら早急の実施するべき」として、約2億円をかけて深夜電力と都市ガスを中心とした熱源・空調機器の更新とLED照明の導入を決断しました。

平成26年9月現在、まだ一部工事が残っている状況で省エネの実績データはありませんが、導入前と比較して重油使用量が約1/4に減る上、電気使用量も年30万kWh(平成25年度の約7%相当)を削減できる見込みです。



ホッ

とコラム

■熊本病院

一人ひとりが取り組む環境配慮～節電推進と備品リユース

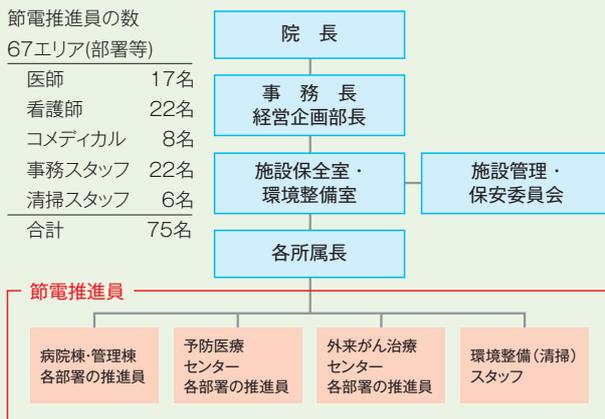
節電推進員の活動

熊本病院では以前より節電に取り組んできましたが、平成23年3月11日の東日本大震災の影響により、電力供給がきわめて厳しい状況となることが予想されました。そして、3日後の3月14日、『病院長からの全スタッフへの緊急メッセージ』を受け、さらなる節電推進活動を開始しました。

まず、活動では、各部署に節電推進員を配置しました。節電推進員はその証としてエコバッジを身につけ、担当するエリアを毎日巡回して取り組み状況を点検表に記録します。電気の消し忘れなどがあれば、自部署のミーティングでスタッフへ注意を促し、節電を呼びかけています。また、節電の周知・啓発のため、エコ放送や節電メールの送信を行い、院内ポータルサイトに電力使用量を毎日掲載して見える化を実施する一方、保温カーテンの設置や窓への遮熱フィルムの施工などハード面でも取り組みを行いました。

職員一人ひとりが節電を意識し、スタッフエリアなどでは照明が少し暗いぐらいで作業を行うなどの取り組みが見られるようになりました。

平成25年度 節電推進体制



備品リユース活動

院内では、部署再編や運用の変更により、各部署から机や棚、テーブルなどが不要品として搬出され、備蓄倉庫に保管されています。長期の保管になると備蓄倉庫としての本来の機能に影響が出たり、大型ゴミとして処分する場合には費用が発生することから、平成22年6月、リユース活動を開始しました。

具体的には、院内ポータルサイトにリユース品として月1回掲載し、希望部署に引き取ってもらい再利用します。関連施設(みすみ病院・福祉センター他)にも呼びかけ、保管スペースの有効利用と不用品の有効活用および処分費用の削減に努めています。

リユース什器・備品



①テーブル



②収納棚



③テーブル



④ソファ



⑤仮眠用ベッド



⑥傘立て

Social Welfare Organization  
Saiseikai Imperial Gift Foundation, Inc.

社会福祉法人 恩賜財団 済生会

〒108-0073 東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル21階

TEL : 03-3454-3311(代)

E-mail : headoffice@saiseikai.or.jp

